

忘れられないあの味

中嶋 華子

「ごめんなさい」  
の一言。たった一言なのに、言えない。ごめんなさいという言葉はとても簡単そうでも、もむずかしい。

これからする話はある年の母の日の前日の出来事だ。私は、毎年母の日お母さんに手紙やプレゼントをあげている。この日、私はお母さんにプレゼントする手づくりクッキー

の材料を買いに来ていた。

「チョコのクッキーがいいんじゃない？」

「ストロベリーの方がいいよ！」

と一緒に来ていたお父さんと「ちらのほうがお母さんがよろこんでくれるかな？」とずっと迷っていた。

家へ帰ると、なぜかすごく怒ったお母さんがいた。私はお母さんに、「どうして怒っているの？」と聞いた。すると、お母さんは

「華子が部屋をかたづけられないからでしょ！」  
「なんで部屋をそんなに汚くするの！」  
と言った。私はそんなことを言うお母さんに  
反論した。  
「別にお母さんには迷わくかけてないでしょ。  
と言うと、お母さんは何も言わなくなった。  
なんだか心がモヤモヤする。」

自分の部屋のドアを開けると、たしかにそ  
こはヒても汚かった。×モ帳やけいたいが床  
に落ちていたり……。お母さんの言っているこ

とが正しかった。なんで、さっき「ごめんな  
さい」とあやまれなかったんだろう。「ごめ  
んなさい」さえ言っていればお母さんは許し  
てくれるかもしれなかったのに……。

「ああ、五分前にもどってお母さんにあやま  
りたい。」

と思った。明日は、母の日なのにそれまでに  
仲直りしなけばお母さんにプレゼントする  
手づくりクッキーもわたせなくなってしまう。  
それだけはなんとかしないと……。

「明日には絶対に仲直りしよう！」  
と思った私はそのままベッドでねてしまった。  
そして、翌日、朝起きてリビングへ行くと  
お母さんはいなかった。

「よし！いまがチャンスだ！」  
と思った私は、早速クッキーづくりを始めた。  
料理の本を見ながらお母さんと仲直りできま  
すようにとつくった。そして、クッキーづく  
りもラストスパート。形を整えてオーブンで  
焼いていく。

「ああ、前もお母さんとクッキーづくりした  
なあ。」  
と思い出した。すると、玄関のドアが  
「ガチャッ」  
となった。

「もしかしてお母さん？」と思いながら、私  
はドアを開けた。すると、そこにはお父さん  
一人だけだった。よかったと安心するとお父  
さんは、

「あともう少しでお母さんが帰ってきてちゃう

ふ！

と言った。すると同時に

っピーピー

とオーブンの加熱が終わった音がした。オー

ブンを開くと、とても甘いおいしそうなにお

いがした。私は、

っこれだったら、絶対仲直りできるな。

と思った。そして、あっつあっつのクッキー

をお皿にのせて少し冷ましてからかわいらし

くラッピングをした。前、書いた手紙にそえ

る。すると、

っガチャッ

と音がした。私は今度こそお母さんだ！とド

アを開け

っ今日は母の日だよ、いつもありがとう！

と言った。すると、お母さんは目をキョトン

とさせた。母の日のことをすっかりわすれて

いたらしい。

っお母さん、早く来て！プレゼントがあるよ。

とお母さんをイスにすわらせて、

「はい！これどうぞ！」  
とプレゼントをわたした。するとお母さんは  
とてもおどろいた顔をして、  
「ありがとう。」  
と言った。私が伝えたかった言葉はこれじゃ  
ない。

「お母さん、昨日は本当にごめんなさい。」  
と言った。すると、お母さんは  
「分かってくれればいいんだよね。」  
と言った。そして、

「クッキー、華子も食べよう！」  
と言ってくれた。クッキー、とても甘くてほ  
んのりしょっぱい味、今まで食べたクッキー  
の中で、一番おいしかった。